

十三べんギリギリ岩 (福島)

福島ふくしまの里に「十三べんギリギリ岩」と呼ばれている岩がある。山から流れ出た谷川が里に流れこむ手前に、両側から岩が迫せまって細くなっているところがある。その岩にはいくつもくぼみになっている場所があつて、両側に同じように彫ほりこまれたように見える。この岩を「十三べんギリギリ岩」というんじゃ。

どうしたつて自然にこんなくぼみはできそうにない。このくぼみがどのようにしてできたのかつて？

ではその訳わけをお話しよう。

むかしむかし、この福島ふくしまの地では日照りがちよつと続くとすぐ水不足になつた。水が不足して米が不作になる年が続いていた。米作りには水が必要じゃ。どこの村の者も水不足には頭を悩ませていた。もう三年も水不足が続いたある時、村の衆は寄り合よいを開いた。

「また今年も水不足が続いたら、子どもらに食べさせるものもない。」

「もう三年も不作続きでは、わしらは生きていけねえ。」

「どうしたらいいものか……。」

知恵を絞しぼって考えた末に、「川の水を堰せき止めよう」ということになつた。幸い谷川沿ぞいに両側から岩が迫せまつているところがある。そこに太い横木をはめこみ、流れをせき止めることにした。

まず、岩にくぼみを彫ほることから始めた。硬い岩に彫ほりこみを入れるのだから、これは並大抵なみたいていの仕事じゃない。でもみんなは必死じゃつた。いくつもくぼみをこしらえたんじゃから、たいしたもんじゃの。

そのくぼみに大きな横木を三段、四段とはめこんだ。思つた通り、水はどんどんたまつていった。しまいには岩の上の方まで水がたまつていき、いっぱいの水をたたえて、まるで湖うみのようになった。

「これで、日照りが続いても大丈夫じゃ。」

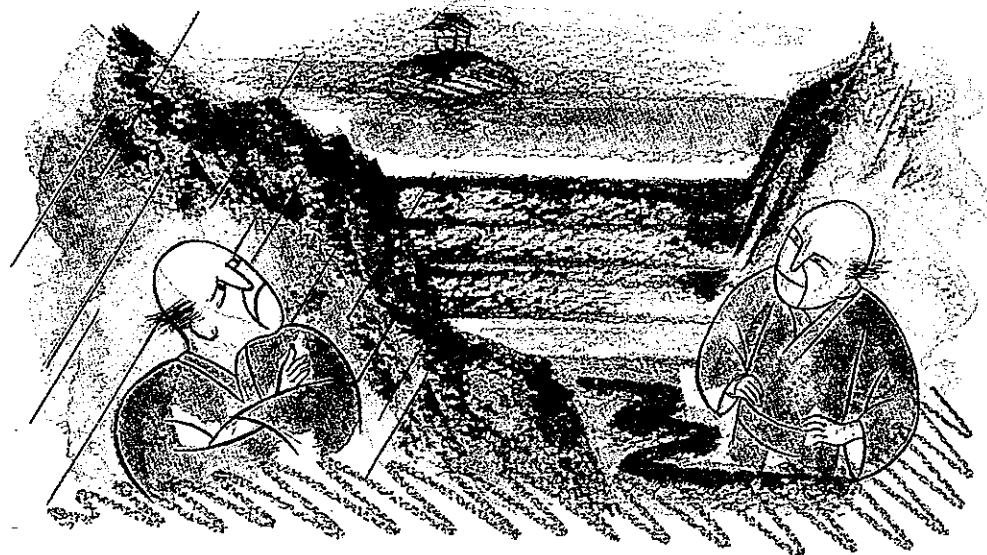
「これでもう、水の備ぼんえは万全ばんぜんじゃ。」

村人たちは、手を取りおうて喜んだ。

その年の田植うえは無事に済んだ。夏には穂ほが付き、秋にはしっかりと実みつた。そして、この堰せきができてからは、日照りが続いても田んぼをうるおすことができるようになった。

て、不作になるようなことはなかったんじゃ。

ところで、この湖の真ん中に、ぼつかり浮かんだ場所がある。ここは小さな浮島うきしまになっていた。この浮島には、八はち



幡まんさんがまつつてある。村人たちは、湖の岸にある「ふしよがみ」（伏拝ふしかがみ）というところからおがんでおった。この水源すいげんを守って欲しいという願いをこめて、村人たちが八幡さんをまつつたのじゃ。

ある時、この話を耳にした九鬼の殿さんが「ぜひ、お参りしたいものよ」と思われた。ところが、なんせ湖にぼつかり浮かんでいるのだから、舟に乗らねばお参りできない。そこで舟を用意することになった。九鬼の殿さんは、わざわざ舟に乗ってお参りに行ったという。ありがたいことじゃて。

だが、この堰せきにはやっかいなこともあった。何年かするとせき止めていた木が朽くちてきて、雨が降り続けると水の圧力が大きくなって「ギリギリ、ギリギリ」ときしみだした。そのうち限界を超すと、堰が切れて洪水じゃ。日照りもこわいが洪水もこわい。村人たちは心配で夜も寝られん。切れそうなときは「ギリギリ、ギリギリ」ときしむ音がする。この堰はなんと十三べんも切れたそうな。そのたびに村人たちは堰を作り直したんだと。

これが「十三べんギリギリ岩」のいわれとくぼみの出来たわけなんじゃ。